

スケートパークの成り立ちと施設特性を踏まえた今後の展望

株式会社新日本コンサルタント
都市計画部 都市環境グループ
係長 大西 太和

から多くの愛好者や競技者が来場し賑わいを見せている。

また、同市出身の中山楓奈選手は幼少期から当施設で練習を重ね、オリンピック競技大会で目覚ましい活躍をし、今もなお世界の舞台で活躍している。

スケートボードにおいては、2021年に開催された東京2020オリンピック競技大会から正式種目として採用され、日本人が多くのメダルを獲得したことによって、子供や若年層を中心に人気が一層高まったスポーツの一つである。

一方、スケートボードは、文化（カルチャー）とスポーツという二つの要素を持っており、争うことではなく自己表現、規律ではなく自由の志向を重んじることが特徴であり、多様化する現代の遊び方を象徴するものと言える。

本稿では、多様化が求められているスケートパークについて、その成り立ちや昨今の施設特性を踏まえ、施設設計の今後の展望を考察する。

2. スケートパークの成り立ち

(1) スケートパークの由緒

スケートボードにはいくつかの競技が存在し、その競技ごとに施設の形状が異なっている。東京2020オリンピック競技大会では、2種目が採用されており、一つは街中の階段や手摺、スロープを模した施設の「ストリートスタイル」、もう一方はお椀のプールのように曲面状に施された施設の「パークスタイル」となっている。

CFI = 0.951, RMSEA = 0.050, SRMR = 0.048, 実線 : p < 0.01, 破線 : p < 0.05

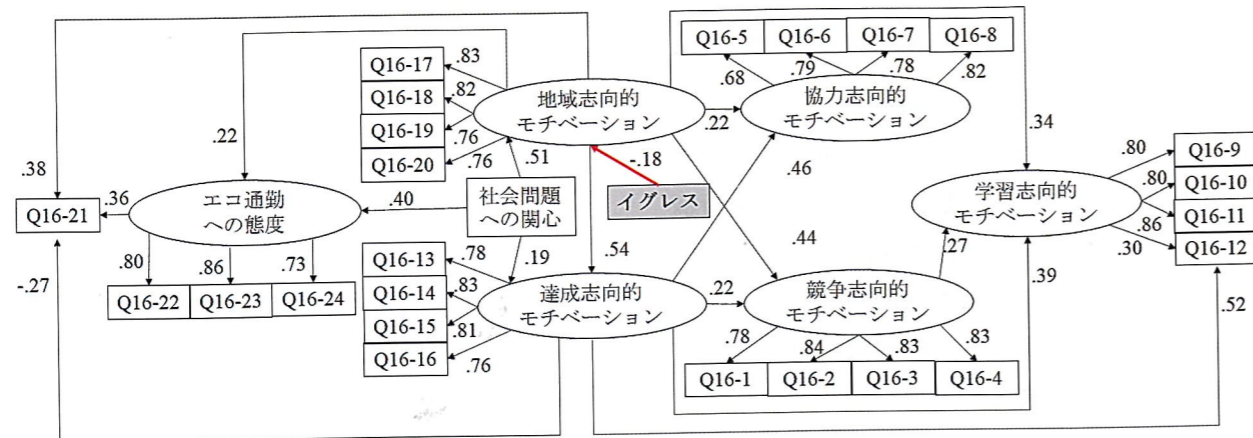


図-3 イグレスを考慮した場合の因果構造（地域企業勤務者）

とで、地域志向的モチベーションが低下するという、新たな関係を示している。すなわち、イグレスの所要時間を小さくすることで、地域志向的モチベーションが向上する可能性があることが推察された。また、地域志向的モチベーションは、その他のモチベーションとエコ通勤への態度への効果も有しているため、イグレスの所要時間を小さくすることで、各モチベーションが増大し、エコ通勤への態度も良化すると演繹できる。

6. 結論

分析結果のまとめを図4に示す。地域企業勤務者と都市企業勤務者には、地域志向的モチベーションの影響に相違があり、地域志向的モチベーションから、エコ通勤への態度や実行意図への影響は、地域企業勤務者においてのみ、統計的に有意となった。また、職場が駅等に近

いほど、地域志向的モチベーションが高く、ワークモチベーションとエコ通勤への態度が同時に良化する可能性も示された。これらの結果より、地域企業経営において、地域志向的モチベーションとイグレスが、社会的要請と経営的要請を両立するうえで重要な要因であり、エコ通勤の推進と企業業績が両立できる可能性があることを示した。

人口減少が進む地方都市において、拠点集中型の都市経営が有効であるが、そこには公共交通の活性化が不可欠である。本稿は、地域企業経営におけるエコ通勤推進への取り組みにおいて、CSR等の利他的精神の発露でなくても、合理的な経済活動としての選択の可能性を科学的に分析できたものと考ええる。

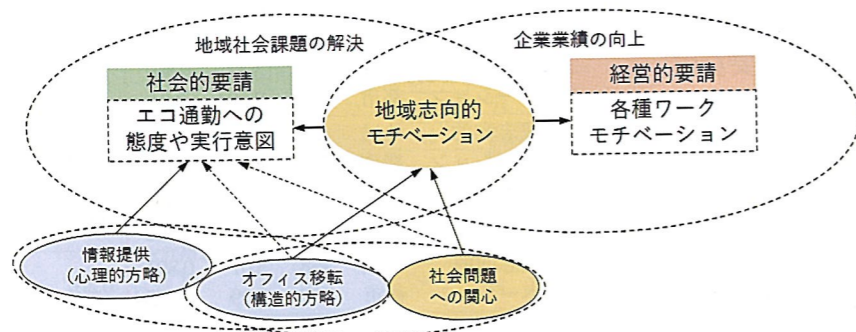


図-4 分析結果のまとめ

※なお本稿は、市森ら¹⁾を基に、本レポート用に内容を再整理したものであり、詳細は以下の文献を参照されたい。

[1] 市森友明、西垣友貴、山田忠史、「地域志向とエコ通勤に着目した地域企業の社会的課題解決とワークモチベーション向上の両立可能性に関する研究」、グローバルビジネスジャーナル、7(1)、pp44-55、2021。

1. はじめに

スケートパーク（写真-1）は、主にスケートボードをはじめとし、インラインスケートや、BMXフリースタイル（自転車競技）（写真-2）など、滑走・走行を楽しむための専用施設である。

富山市にも、専用施設である「富山市ストリートスポーツパーク」（写真-1）が存在し、国内有数の本格的なスケートパークとして、市内外

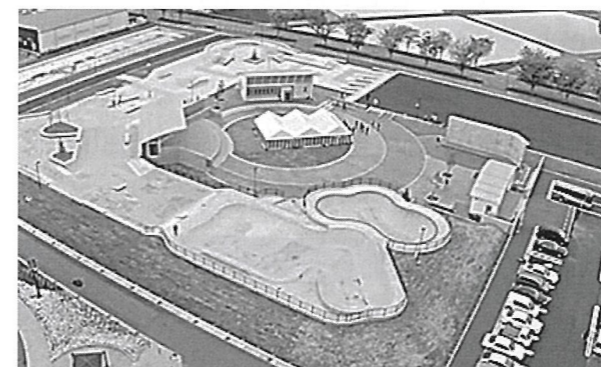


写真-1 スケートパーク(富山市ストリートスポーツパーク)



写真-2 スケートパークで行われる競技
(上: スケートボード 下左: インラインスケート 下右: BMXフリースタイル)

それぞれに競技の由来があるが、スケートボードの歴史においては、「パークスタイル」が先行して普及した。

スケートボードは、1960年代にアメリカ・カリフォルニア州で普及したとされ、1970年代に、より楽しい遊び方を模索した人々が、住宅用のプールで滑走し始めたことが現代の「パークスタイル」と呼ばれる基となる。

当時のカリフォルニア州では、箱型の一般的なプールではなく曲線を多用した通称「キドニー型プール」(Kidney:腎臓)(写真-3)が流行しており、多くの住宅で取入れられていた。^{※1}その曲線形状が、スケートボードの滑走に適しており、プールの中を流れるように滑走して楽しんでいただとされる。



写真-3 キドニー型プール^{※2}

同形状を模した施設は富山市ストリートスポーツパーク(写真-4)にも整備されるなど、今日においてもキドニー型プールを模した施設が多く存在する。

さらに、スケートパークは当時のプールで使用されていた笠木(コーピング)やタイル(写真-5)が欠かせない施設デザインであることや、当時のプール施工方法と同工法である吹付コンクリートによる打設が基本となるなど、多岐にわたって大きな影響を受けている。

(2) スケートパーク建設のはじまり

スケートパークの歴史は、今日より50年以内に誕生した短いものである。

前述した住宅用プールで滑走することは、



写真-4 富山市ストリートスポーツパークのキドニー型プール

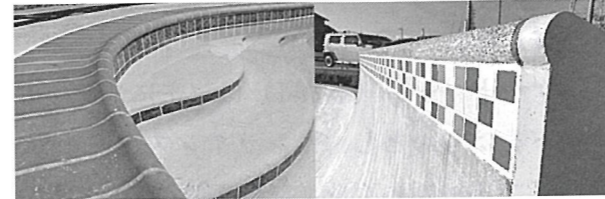


写真-5 笠木(コーピング)とタイル
(左:キドニー型プール 右:スケートパーク)

他施設を利用した遊びであり、スケートボード専用施設として初めて整備された施設は、1976年カリフォルニア州サンタクルーズ郡で整備されたDerby Skatepark(写真-6)とされている。施設は、斜面地を利用してサーフィンの波に見立てた曲面や、湾曲したプール形状をコンクリートによって表現した施設となっており、2020年東京オリンピックの種目としては「パークスタイル」に分類される施設である。



写真-6 Derby Skatepark^{※3}

一方で、同じく種目となった「ストリートスタイル」を主とした施設が誕生するのは1990年代以降とされており、これらも専用施設ではない場所や構造物(公共の都市部にある階段や手摺、ベンチなど)を利用して楽しんでいただことが起源となっている。

3. 自由度の高い施設

スケートパークは、本来泳ぐことを目的としたプールや市街地などの公共空間、また、そこに整備された階段や手すり、座るためのベンチなどがデザインの由来である。それら公共施設は重要なランドスケープデザインとして設計されることから、スケートパークにおいても同列に扱うことが必要とされ、ただ滑走ができることに止まらず、洗練された空間形成であることが施設の評価となる。

それらの特性から、今日においても施設の詳細規程は定められておらず、施設ごとに形状や規模が異なる自由度の高い施設となっており、それらがむしろ魅力となっている。

4. スケートパーク設計の事例

富山市を含めた主な国内の事例として、「富山市ストリートスポーツパーク」や、東京2020オリンピック競技大会の正式会場である「有明アーバンスポーツパーク」、等があげられる。

「富山市ストリートスポーツパーク」は2014年に竣工しており、海外のスケートパークデザイン専門会社が監修した本格的な施設となっている。施設は、オリンピック競技種目の「ストリートスタイル」(写真-7)と「パークスタイル」(写真-8)どちらも兼ね備えた施設であり、初級者から段階を経て練習ができる配置構成が設計されている。また、施設の特性としては、滑走動線を植樹帯で分散することで利用者が安心して利用できるような配慮されることや、施設に緑感を加えたレクリエーション性の高い施設であることが挙げられる。

「有明アーバンスポーツパーク」(写真-9,10)は、専用競技施設として最大規模を誇り、セクション(技をするための構造物)は複雑でありながら、すべての選手が平等に採点を受けられるよう、シンメトリーに近い配置構成をしてい



写真-7 富山市ストリートスポーツパーク
(ストリートスタイル)



写真-8 富山市ストリートスポーツパーク
(パークスタイル)

る。さらに、セクションに使用する鋼材やコンクリート配合設計は、これまでの仕様を見直し、より高強度な仕様を採用され、高度化し続ける選手の技を引き出すための配慮がされている。また、殆どの方が映像配信によって競技を観戦することから、施設内に映像カメラ用ボックスを配置し、より臨場感のある配信をすることで、競技の魅力を伝える工夫が施されている。



写真-9 有明アーバンスポーツパーク
(ストリートスタイル)

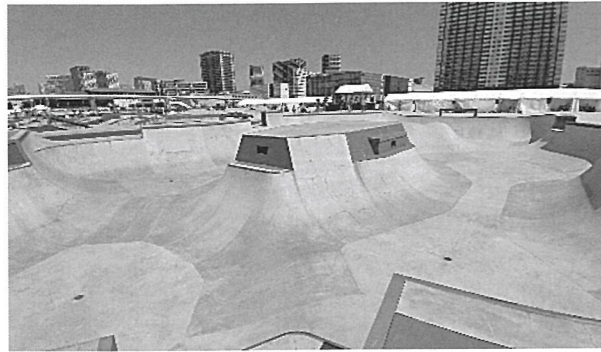


写真-10 有明アーバンスポーツパーク
(パークスタイル)

以上の2施設においても、他施設と同じ形状や配置構成は無く、施設特性がそれぞれで異なっており、設計はニーズを捉えた自由度の高いデザイン、レイアウトの設計が必要となっている。

5. 今後の展望

昨今の競技における日本人選手の活躍は目覚ましく、スケートパークがスポーツ施設として広く認知され始めており、競技は大きな過渡期

を迎えている。さらに、2024年パリオリンピック、2028年ロサンゼルスオリンピックまで正式種目として内定していることから、継続して人気が高まると期待する。

また、自由の志向性が高いという競技特性は多様化する現代スポーツとして、子供や若年層に広く支持されており、新しいスポーツ施設としてより需要が高まると考える。

スケートパークの計画では、ランドスケープとの親和性を重要と捉えながら、今後高まる施設需要に対して、それぞれのニーズに応じた自由度の高い施設計画が望まれる。

参考文献：

- ※1 カリフォルニア・デザイン1930-1965モダン・リビングの起源/ロサンゼルス・カウンティ美術館、国立新美術館、新建築社【編】
- ※2 The Cultural Landscape Foundationホームページ
- ※3 Wormhoudt Incorporatedホームページ

会員寄稿

世代交代の足音が聞こえる!!

株式会社明和

技術部 高嶋敏秀

1. 言葉は時代で変化する

若い技術者の応援に出かけると、当たり前に使ってきた「用語」が伝わらない。

「トランシットはこのポイントで、足元が悪いから、そこのバタ角使おうよ」

「・・・え〜っと？トラン？シット？バタ角・・・？ちょっと何言ってんのかわかんない・・・？（サドウィッチマン風に読んでみて）」

逆の場合も、イヤ逆の場合の方が多い「この図面の掘削ラインがハッキリ分からないけど、もう少し何とか・・・」

「ココを基点にして、オブジェクトを回転すれば・・・こんな感じですね！」

「おお、こう来たか（孤独のグ○メ風に）」と言いながら、なぜか負けちゃった感が胸にあふれ「日本語はむずかしいな」と、言い逃れのように呟ることになる。

2. もっと会話をしよう

職場におけるハラスメントが問題視されているが、根底にあるのはコミュニケーション不足であることは良く知られている。

建設業には特殊な用語が多いと言われるが、決してそうではなく製造業、サービス業においても業界独特の用語は数多く存在し、最近若い人が頻繁に使う「ヤバイ」は裏家業から来ているのは周知の事実である。

注意すべきは対面で指示・指導をしているならば相手の雰囲気から「？」になっていることは、過去の経験からも分かるはずであり、そこで「これはね・・・」と説明することを面倒くさいと放置したり、ムツとするなどの傲岸不遜な態度は慎むべきである。

ただし無理をして若い世代に迎合する必要はない、見たくもないアニメを見てア○ニヤかわいいとか、フー・ファ○ターズの健気さに感動とか、そもそもこんな文章は「自動書記○形」に書いてもらえばいいのになどと、底の浅い感想は失笑を買うだけであろう。

3. 世代交代への準備

黙って座っているだけでも時間は流れ、生物としての世代交代は行われるが、経験を伝え技術を継承していくためには準備が不可欠であり、実行するには時間も必要である。

現場用語の背景には、経験的に使っている知識だが簡単に言葉で説明できない内容である「暗黙知」が多く含まれるため「知っている個人」がいなくなれば消滅してしまうことになる。

これを誰でも利用できる「形式知」として残していくには、マニュアルや記録だけでは不足であり「分かるように説明」する有益なツールとして「よく聴いて」「言葉を交わす」を大事にしていきたい。

残された時間は少なく明日からでは間に合わない、せっかくコロナに対する社会的要求が変化しつつある、今こそチャンスかもしれない。

4. おわりに

新型コロナウイルスとの戦いは、新たな変異株の出現もあって長期戦が懸念されます。コロナ過で業務を進める中でのリモート対応など様々な行動規制がかかり、嫌気がさす今日この頃ですが、この感染症が恐れる必要のないものとなり、戦いに終わりの日が来ることを祈るばかりです。